水上勉的中国体验
——创作作品的源泉

孙　旸◇著

水上勉の中国体験——作品を生みだしたもの

黑龍江大學出版社
HEILONGJIANG UNIVERSITY PRESS

水上勉的中国体验
——创作作品的源泉

孙　旸◇著

水上勉の中国体験——作品を生みだしたもの

黑龍江大學出版社
HEILONGJIANG UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

水上勉的中国体验：创作作品的源泉：日文／孙旸著. -- 哈尔滨：黑龙江大学出版社，2014.6
ISBN 978-7-81129-740-9

Ⅰ. ①水… Ⅱ. ①孙… Ⅲ. ①水上勉(1919~2004)-文学研究-日文 Ⅳ. ①I313.065

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 101627 号

水上勉的中国体验——创作作品的源泉
SHUISHANGMIAN DE ZHONGGUO TIYAN——CHUANGZUO ZUOPIN DE YUANQUAN
孙 旸 著

责任编辑 佟 馨 张 慧
出版发行 黑龙江大学出版社
地　　址 哈尔滨市南岗区学府路 74 号
印　　刷 哈尔滨市石桥印务有限公司
开　　本 720×1000 1/16
印　　张 12.5
字　　数 154 千
版　　次 2014 年 6 月第 1 版
印　　次 2014 年 6 月第 1 次印刷
书　　号 ISBN 978-7-81129-740-9
定　　价 39.00 元

本书如有印装错误请与本社联系更换。
版权所有 侵权必究

前言

日本战后文学代表作家水上勉(一九一九年—二〇〇四年)从一九四八年的处女作《平底锅之歌》(『フライパンの歌』)的发表开始,到二〇〇四年九月去世的五十六年间,发表了约二百篇小说、约二百篇纪行文、约一百篇随笔等。这些作品主要收录在《水上勉全集》(中央公论社、全二十六卷)和《新编水上勉全集》(中央公论社、全十六卷)中。但未被全集收录的作品也相当多。在日本的当代文学研究中,对水上文学的研究主要集中在其七十年代以前的作品(水上文学前期)。而七十年代末开始的文学作品则很少被关注。

众所周知,一九三八年,水上勉不仅在中国奉天做过劳工,一九七五年后,作为中日友好协会成员曾先后二十多次访问中国,对中国有着深厚的感情。同时,水上勉对中国禅宗抱有浓厚的兴趣,为了创作取材,多次参观中国的寺庙,尤其是与慧能相关的寺庙。从前期诠释妓女的佛性,到后期的中国纪行、长篇小说《沈阳的月》、短篇小说集《清富记》,再到封笔之作《虚竹的笛子》,无不渗透着中国文化对作家的深刻影响。中国是其艺术思想迸发的基点,是其文学创作的源泉。

水上勉用中国的禅宗思想救济生活在苦难中的无奈与不幸的人们,将生命的体验浸透在文学作品的形象塑造里。而这种中国体验,是作家对中国文化的理解和接受。本书作为漫长探索之旅的开篇之作,试图考察日本作家水上勉与中国的关系,再一次从尊重人性的高度展示作家对人与人及人性的深刻理解和认识。而这种理解,无疑与作家长期的中日文化融合,对中国文化的追崇与关注及深刻的理解分不开。

目次

はじめに……1
第一章　中国への旅……43
一、中国へ——旅の記録との交流……43
二、中国への関心……49
第二章　中国を書いた紀行文……65
一、中国関連紀行文の研究史……67
二、水上の紀行文について……70
三、中国の寺に取材して……79
四、生活文化の体験……81
五、故郷の発見……85
第三章　中国における水上文学の評価……90
一、作品の翻訳と研究状況……90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二、戯曲の公演……96
まとめ――水上後期作品に注目する……110
参考文献……117
附録……128

はじめに

一、研究の目的と意義

水上は一九四八年の『フライパンの歌』を処女作として発表してから、二〇〇四年九月に八十五歳で没するまでの五十六年間に、約二百篇の小説、約二百篇の紀行文、約百篇の随筆その他を書いた。それらは、全集（一九七八年の『水上勉全集』（中央公論社、全二十六巻）と一九九五年の『新編水上勉全集』（中央公論社、全十六巻））にまとめられているが、収録されなかったものもかなりの数にのぼる。また、共著は十五篇がある。

水上文学の研究状況については、諸雑誌、諸研究誌の特集号を参考にすると、水上の二十世紀七十年代以前の作品に関する研究が多い。（特集号の詳細はのちに掲げる。）全体としては、前期（一九七〇年代末前）の作品に対する研究は行われているが、後期の作品（一九七〇年代末―二〇〇四年）は殆ど手がつけられて

いない。水上の後期作品は、中国を素材・題材とする小説およびたくさんの旅行記や随筆などである。日本文学においても、アジア文学においても、特に中日文化交流史においても、水上文学の重要性を検討することが必要だと思う。

この本では、水上がなにゆえに中国に関心を抱くようになったのか、なぜ水上は中国関係について書いたのだろうか。どのように中国を書いているだろうか。中国関連の作品は水上にとって、どんな意味があったのだろうか。どのように位置づけられるのだろうか。中国体験は水上勉の人生及び文学にどんな影響を与えていたのだろうか、などを詳細に検討し、水上文学の根源に潜んでいるものをえぐり出してみようと思う。後期の作品群を扱うのは恣意的に選択した方法ではない。後期の作品群を検討することによって、水上文学全体を見渡し、その根底に流れるものをくっきりと浮かび上がらせることができるからだ。たとえば、『瀋陽の月』（発表当初は『瀋陽の半月』。のち改稿された）についていえば、一個の作品として価値があるだけではなく、きわめて個性的な生き方をした水上勉の生の軌跡、内面の深化、時代とのかかわりなどが「実」と「虚」を織り交ぜながら、語られている。とりわけ『瀋陽の半月』から『瀋陽の月』への改稿は、そうした問題と深く絡んでいることがわかる。

さらに、この本では、水上の中国関連の作品を検討して、水上の文学観、人生観の深まりを考察してみる。その上で、水上文学の本質を明らかにする。なお、水上の後期文学活動が深化したことについては、日本と中国との文化交流史が大きな基盤となっていたことを検討してみる。

二、水上勉の人

水上勉（一九一九年生―二〇〇四年没）は、日本の戦後文学を代表する作家として数多くの文学作品を残した。水上文学を形づくったものは、よくいわれるように幼いころから味わった悲しみと苦しみの人生体験であった。

祖田浩一の「水上勉年譜」[1]によれば、一九三〇年二月、わずか十一歳にして両親と別れ、故郷の若狭を離れ、京都の瑞春院という禅寺に入り山盛松庵師のもとで修行することになった。だが、二年後、出家したことを後悔し瑞春院を脱走してしまう。間もなく引きもどされ、同じ禅寺の相国寺塔頭の玉龍庵に住むことになる。同年十一月、天龍寺派別格地衣笠山等持院に移っている。

水上の入寺・出家は、貧しい家庭ゆえの口減らしのためだった。そのせつない心が、作品の随所に出ている。望郷、母性願望、父との愛憎、都市と辺境、僧と俗人などをテーマにした小説を書き、多くの読者を魅了した。

水上文学のテーマを纏めてみると、水上文学を考える上で、水上勉の人生体験を切り離すことができない。中国関連の作品においても同様である。

1　『水上勉全集・第二六巻』（中央公論社、一九七八年）

三、水上勉のなり

（一）水上勉と中国

水上は一九三六年等持院をさらに出て還俗し、やがて満州に渡ったが、この体験については晩年になってとりあげるようになった。

祖田浩一の「水上勉年譜」を読むと、水上は、一九三八年四月には、京都府満州開拓青少年義勇軍応募係となり府下を巡回。その年の八月には「はるぴん丸」で満州に渡り、奉天の国際運輸会社で苦力監督見習として働く。だが、十一月には喀血して帰国を命じられた。

一九三九年二月、帰国して若狭の生家で病気療養につとめ、かたわら文学書を耽読。水上は満州で苦しく寂しい生活を送り、また肺病にかかったので、『谷崎潤一郎集』、『芥川龍之介集』、井伏鱒二の『朽助のいる谷間』、とりわけ『屋根の上のサワン』などを読んで、弱い人間の描写をしている作品に対して興味が湧いたと考えられる。満州から戻って、水上は文学に対する興味を抱いた。その後、水上は仕事を転々としながら、創作をはじめて、作品を発表して行く。水上にとって、満州体験は人生の大きな転換点だったと考えられる。

一九六一年に、『雁の寺』で直木賞を受賞した。さまざまな作品を発表し、作家としての地位は確立され

た。近代日本を代表する作家の一人として世間に認められるようになった。

一九七五年に、中日友好交流のため、水上は日本作家代表団に参加して、初めて戦後の中国を訪問した。その後頻繁に中国を訪問して、一九九七年には、北京の人民大会堂で中日国交正常化二十五周年記念祝賀会に出席、江澤民国家主席と会見、これが最後の訪中となった。二十二年間に水上は数十回中国に渡ったし、また中国の訪問団も歓迎し自宅にも招待した。一九六三年に中国の作家・巴金の日本訪問、一九六五年には老舎を歓迎するなど、多くの中国文化人の日本訪問を親切に歓迎した。日本と中国の友情を広く深く育むうえで、計り知れない貢献をしたのである。その後、何回も中国の作家代表団を迎えて、二〇〇二年に長野の北御牧村の別荘で、上海市人民対外友好協会代表団の団長として来日した王安憶を迎えたのが最後になった。[2] また、中国禅への関心もあって、水上は何回も中国へ旅行し、多くの寺を訪れて取材した。

ところで、一九八七年、水上は、帰国して心筋梗塞になったが、一命を取りとめた。その後書いた作品を見ると、生と死という問題に対する考えが深まったと思われる。水上が心筋梗塞になったことは、またもう一つの人生の転換点ではなかろうか。

以上のように、一九三八年に中国満州の体験があり、晩年の中国体験があった。彼の一生、彼の文学にとって「中国」は重要な位置を占めている。水上は一九七〇年代（五十歳頃）から、中国関連の作品を書き始

2　水上の中国訪問、取材旅行、中国作家代表団の歓迎などの具体的な年時、内容は第二章に記す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

め、後期文学の大きな柱となった。

中国体験は水上文学に対して少なからぬ影響を与えているが、これまで殆ど論じられてこなかった。ただし、水上と仏教との関係は注目されていてよく論じられているが、中国まで渡って禅の真髄を求めていることはあまり注目されていない。水上の中国に関する作品が多いにもかかわらず、水上勉と中国とのかかわりを追究して考証した先行研究は極めて少ない[3]と思われる。

重要な中国関連の作品とは、

『瀋陽の月』

『北京の柿』（中国紀行文集）を代表とする中国紀行文

『清富記』（短編集）

『虚竹の笛――尺八私考』である。

これらに関する先行研究を眺めてみると、

『瀋陽の月』についての先行研究は、『瀋陽一九三八年――生きることの現場』という、水上勉と木村光一の対談がある。それ以外はない。

3　柯森耀は「水上文学と中国」（『国際日本文学研究集会会議録・第一四回』、国文学研究資料館、一九九〇年、一二〇頁）で、「水上文学は中国と深い縁で結ばれている」と述べている。

『北京の柿』については殆どない。

『清富記』（短編集）については、千石英世の「今月の文芸書――水上勉『清富記』」、岩橋邦枝の「大悟徹底せず」、祖田浩一の「龐居士と孟阿」以外に殆どない。

水上文学における最後の長編小説『虚竹の笛――尺八私考』については、宮城谷昌光との対談「歴史と小説が出会うところ」、菅野昭正「『虚竹の笛』の音を聞いて」、樋口覚との対談、「『虚竹の笛』と小説の醍醐味」、樋口覚の「創作と史実の境界」、祖田浩一の「『虚竹の笛――尺八私考』を読んで」、中西進「吹管の音の象徴するもの」があげられる程度である。

しかし、水上文学の全体像を捉えるには、それらの内実を正確に押さえなければならない。

さて、「水上勉と中国」という研究を考えるためには、「日本近代文学における中国」に関する研究も視野に入れる必要がある。日本近代の作家が中国ないしアジア諸国に対してどのような関心をもち、どのように体験し、どのような作品を書いたのかという検討には、次にあげるような成果がある。

川村湊『アジアという鏡――極東の近代』（思潮社、一九八九年）

芦谷信和『作家のアジア体験――近代日本文学の陰画』（世界思想社、一九九二年）

昭和文学会『昭和文学研究』第二五集（一九九二年）

芦谷信和、上田博『作家の世界体験――近代日本文学の憧憬と模索』（世界思想社、一九九四年）

川村湊『戦後文学を問う――その体験と理念』（岩波書店、一九九五年）

宮城谷昌光、安西篤子、井上祐美子、等『異色中国短篇傑作大全』（講談社、一九九七年）
中西進、周一良『日中文化交流史叢書』（大修館書店、一九九五―一九九八年）
小島晋治『大正中国見聞録集成』（ゆまに書房、一九九九年）
杉野要吉『交争する中国文学と日本文学――淪陥下北京１９３７―４５』（三元社、二〇〇〇年）
川西政明『昭和文学史』（講談社、二〇〇一年）
神谷忠孝、木村一信『〈外地〉日本語文学論』（世界思想社、二〇〇七年）
王向遠『王向遠著作集・中国題材日本文学史』第四巻（寧夏人民出版社、二〇〇七年）

特に満州についての研究は、以下の通りである。

川村湊『異郷の昭和文学――「満州」と近代日本』（岩波書店、一九九〇年）
杉野要吉『「昭和」文学史における「満州」の問題』第一、二、三巻（早稲田大学教育学部杉野要吉研究室、一九九二―一九九六年）
川村湊『文学から見る「満洲」――「五族協和」の夢と現実』（吉川弘文館、一九九八年）
岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』（研文出版、二〇〇〇年）

まず、以上の著作を参考にして、日本近代文学における中国関連の作品及び作家を纏めてみる。次に「中国の歴史典籍に基づいて歴史事件や、歴史人物を描く作品」「中国への紀行文」「戦争及び戦争体験などを題材とする作品」「「満州」に関する作品」という四つの観点を立ててみる。

1. 中国の歴史典籍に基づいて歴史事件や、歴史人物を描く作品

日本近代文学における、森鷗外（一八六二―一九二二年）は、中国の歴史題材による小説の開創者の一人と位置づけられている。『寒山拾得』（一九一六年）は中国唐代の僧侶を取り上げた小説である。

幸田露伴（一八六七―一九四七年）の『運命』（一九一九年）は建文帝のことを取り上げて書いている歴史小説である。また、『暴風裏の花』（一九二六年）は李自成を中心に書いている。『幽情記』（一九一四―一九一六年）は十三篇の小説を収めている。『真真』『師師』『樓船斷橋』『水殿雲廊』『共命鳥』『一枝花』『泥人』『玉主』『碧梧紅葉』『狂濤豔魂』『金鵲鏡』『桃花扇』『幽夢』それぞれも中国の歴史の人物とその詩文を分析しながら、詩人のことを描写している。

中島敦（一九〇九―一九四二年）の『山月記』（一九四二年）は、唐代の『人虎伝』に基づいて書かれた小説である。『名人伝』（一九四二年）は『列子・湯問』に取材して、哲学の思想を追及した。『弟子』（一九四三年）は、中国の孔子と弟子を主人公とする小説。『李陵』（一九四三年）は、『漢書』における李陵に関する部分に基づいて書いている小説。

吉川英治（一八九二―一九六二年）の長編小説『三国志』（一九四三年）は、中国古典小説『三国志』に基づいて書かれているが、人物などを改めて描いているところもある。『新・水滸伝』（一九五八―一九六〇年）は、「章回体」の書き方を取らず、会話を中心に人物の内面の描写に工夫が見られる。

谷崎潤一郎（一八八六―一九六五年）は中国に行くまえに、『麒麟』（一九一〇年）『秘密』（一九一二年）『人魚の嘆き』（一九一七年）を著した。

佐藤春夫（一八九二―一九六四年）は、『樊噲』『李太白』（一九一八年）『李鴻章』（一九二六年）などで中国の歴史人物を描いている。

芥川龍之介（一八九二―一九二七年）の小説は、『仙人』（一九一五年）『酒虫』（一九一六年）『奇遇』（一九二一年）『黄粱夢』（一九一七年）『杜子春』（一九二〇年）『秋山図』（一九二〇年）などが中国古典籍に取材して、中国の神魔などのことに興味を持って、小説を創作した。また、芥川龍之介の『湖南の扇子』『南京の基督』は中国の娼婦を主人公として書いている小説もある。

武田泰淳（一九一二―一九七六年）の『王者と異族の美姫たち』（一九六七年）『十三妹』（一九六五年）『揚州の老虎』（一九六八年）『秋風秋雨人を愁殺す――秋瑾女士伝』（一九六七年）も中国の歴史小説に基づいて書いた小説。

井上靖（一九〇七―一九九一年）の『漆胡樽』（一九五〇年）『玉碗記』（一九五一年）『異域の人』（一九五三年）『天平の甍』（一九五七年）『敦煌』（一九五九年）『蒼き狼』（一九五九年）『楊貴妃伝』（一九六五年）も中国の歴史に取材して、創作した小説。彼は日本と中国の古代文化交流をモチーフとして取り上げて書いている。

柴田錬三郎（一九一七―一九七八年）の『三国志・英雄ここにあり』（一九六八年）は歴史人物の身分を

改めて設定し、虚構した人物も登場させた。

海音寺潮五郎（一九〇一―一九七七年）の『蒙古来たる』『孫子』も中国の歴史を背景とした。『中国英傑伝』（一九七一年）（短篇小説集）は、中国の典籍に基づいて書かれている。『史記』から影響を受けたと言われている。『中国妖豔伝』（一九五五年）（短篇小説集）も中国古代の女性を中心に描かれた。

司馬遼太郎（一九二三―一九九六年）の『項羽と劉邦』（一九八〇年）は、『史記』の作者司馬遷に習って書かれた小説。『韃靼疾風録』（一九八四―一九八七年）は、中国古代の女真族の人々を主人公として描かれている。『空海の風景』（一九七五年）は中日交流を背景として、僧・空海のことが描かれた長篇小説。

伴野朗（一九三六―二〇〇四年）の『五十万年の死角』（一九七六年）は北京原人の化石の行方の問題に関する推理小説。『始皇帝』（一九九五年）、『朱龍賦』（一九九二年）は、中国の皇帝将相を中心に描かれた小説。『鬼謀列伝』（二〇〇二年）に中国の歴史における六名「鬼謀」将相を取り上げて書かれた小説集。その後の『刺客列伝』（一九九二年）『士は己を知る者のために死す』（一九九三年）『反骨列伝』（一九九六年）『謀臣列伝』（一九九八年）なども『史記』から受けた影響が大きい。『大遠征』（一九九〇年）『西域伝

大唐三蔵物語』（一九八七年）なども日中文化交流に貢献した人たちを主人公として描いた作品。

宮城谷昌光（一九四五年―）は中国の先秦時代を背景として、沢山作品を書いている。『王家の風日』（一九八八年）『天空の舟』（一九九〇年）『夏姫春秋』（一九九一年）『侠骨記』（一九九一年）『孟夏の太陽』（一九九一年）『沉默の王』（一九九二年）『花の歳月』（一九九二年）『重耳』（一九九三年）『介子推』（一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com